

先日の降雪で、2月に入って2度目の雪かきをしました。東京の雪は毎年のこととはいえ、今年の冬はやはり寒いですね。この季節は外来でも、高血圧などの定期的な通院の患者さんは少なく、発熱や腹痛などの急性疾患の初診の方が目立ちます。

そのような中、当初世間では余り盛り上がっていなかったソチオリンピックへの関心が急激に高まったようです。やはり日本の選手が活躍する報道を見聞きすると嬉しいものです。

特に10代で多くの観衆の前で躍動感あふれる演技をした羽生選手のタフさと41歳でも世界一流のアスリートの地位を維持している葛西選手の執念はやはり特筆すべきことと思います。

冬季オリンピックは夏季開催に比べて規模も小さく、出場選手たちの日常生活は苦勞が多いことでしょう。今後、私はオリンピックの好きな国、日本人の一人として何か役に立ちたいなと思いながらテレビを見ていました。

また、東京オリンピックの開催時には是非ボランティアとして選手や観客の方の手伝いをしたいとも思っています。



ところで運動競技の実況中継でよく解説者が「アドレナリンが出過ぎて失敗したのでしょうか？」などと説明する事があります。そこで、オリンピックにちなんで今回はアドレナリンについて少々。

アドレナリンは心臓の働きを活発にし、新陳代謝を高める作用のあるホルモンです。(ホルモンとは、いろいろな臓器の働きを調節血液中の成分のことです)

このホルモンは副腎という左右の腎臓の上に乗っている、5g程の小さな臓器から分泌されています。

お腹の手術中に観察すると指先程の大きさで黄色味を帯びていますが、とても重要な臓器とは思えません。しかし、実際には生命を維持して行くためにとても大切な役目があり、その一つがアドレナリンを分泌することです。アドレナリンは強いストレスやショックの際に、また精神的な興奮時に分泌され身体を守ってくれます。

ですから「アドレナリンが出過ぎて……」の文言は緊張のあまり必要以上力が入ってしまった状態の比喻として使われています。大切な仕事の前、車に衝突しそうになった後、激しい運動の際に心臓がドキドキしたら体を守るために副腎は働いていると考えると興味が湧きますね。

寒さに嫌気がさしてきた昨今ですが、オリンピックフィーバーが過ぎるころには春の気配が感じられるようになってほしいですね。桜の開花宣言までのしばらくの間をどうぞ大切にお過ごしください。



伊藤外科内科医院 HP

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



三弓先生の本棚 39

伊勢物語

今月取り上げさせていただくのはバリバリの古典、平安時代初期に誕生した彼の有名な『伊勢物語』である。実はこのところ、ちょっと古典づいている。現在、寝しなに読んでいるのは、同じく平安時代の作者不明『うつほ物語』である。こちらは日本初の長編物語といわれている作品で、その冒頭の巻に描かれている秘伝の琴にまつわる物語が読みたくて、手に取った。

今年の正月番組で、日本文学者のドナルド・キーン氏がこんな（内容の）発言をしていた。「『源氏物語』が世界でどれほどたくさん読まれているか、知っていますか？ それなのに、若者に限らず、今の日本人は『源氏物語』を読まない。どうしてかということ、学校の古典の授業で、その物語世界のおもしろさを伝えず、古典を単なる文法学習の教材にしているからです。その意味では、学校の古典の授業は犯罪ですよ！」。う～ん、わが意を得たり!! 人生後半戦に十分入っている年になって、初めて「古典って、かなりイケてる」と思い始めたワタクシとしては、つくづく、「嗚呼～、このおもしろさを十代のうちに知っていれば、いままでどれだけたくさんの古典文学が読めたか……」と、古典の先生に責任転嫁しながら、思う次第です。

そうはいっても、何十年も古典を読んでこなかったワタクシがいきなり原文を読むというのは、ハードルが天ほど高いわけで。『伊勢物語』にしても、「在原業平とかいう歌人と、なんか関わる話だよな。在原業平って、とうきょうスカイツリー駅の前の駅名・業平橋駅の業平さんだよな」くらいしか知らないわけです。

——『伊勢物語』を簡単に説明すると、これは歌物語（いくつもの和歌を取り上げ、その歌の背景を描く一話完結の短編集）。在原業平の和歌が多く採録されているので、この人物の印象が強い。実在する人でありながら、物語の中では読み手が好みそうな人物像に仕立て上げられているらしい。ちなみに、在原業平はたいへん高貴な生まれで、国史『日本三大実録』には「容貌バツグンで奔放、勉強は好きじゃないけど、和歌は大好き」な人物と記されているとか。

このように古典に素養がないワタクシが、それでもなにか作品を読もうと思う時にまず手に取るのがマンガ本である。今までも各出版社が古典文学のマンガシリーズを出してきたが、この2月から小学館で「マンガ古典文学シリーズ 全10巻」の刊行が始まった。そのなかに、黒鉄ヒロシ氏が描く『伊勢物語』があったのだ。このシリーズは、里中満智子氏による『古事記』、水木しげる氏による『方丈記』（これも読みたいな）と、そうそうたる先生が執筆している。『伊勢物語』も読みやすくおもしろいだけでなく、黒鉄ヒロシ氏の古典に対する造詣が生半可ではないだろうことが伝わってくる。

ワタクシの場合、マンガの次に手に取るのが、原文・訳文・解説付きの文庫である。この訳文だけをまず、できるだけ声に出しながら読み、筋が頭にすっかり入ったら、原文に進むといった次第。今は『うつほ物語』の訳文を、お風呂のなかで声を出して読むのが日課です。 (一弓)